三日月島

波島祐一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
三日月島

【Ｎコード】
Ｎ３１７９Ｌ

【作者名】
波島祐一

【あらすじ】
西暦２０１Ｘ年。異常な海底隆起によって、九州沖に新しい島が現れた。三日月の形をしたその島は、暫定的に”Ｓ島”と名づけられた。Ｓ島によって得られる資源を重要視した政府は、自衛隊の派遣を決定する。陸海空三自衛隊が出動し、Ｓ島周辺における部隊の展開を完了した。しかし、Ｓ島の存在に気づくと同時に領有権を主張し始めた韓国が軍事行動を開始する。

Prologue：S島

２０１Ｘ年晩冬――

午前九時に茨城県百里（ひゃくり）基地を離陸した、第５０１飛行隊所属のＲＦ－４ＥＪ戦術偵察機は、日本列島を西南に向けて横断し、福岡県築城（ついき）基地で給油を済ませたのち、さらに西南に向けて飛行していた。

五島列島を通過し、四百キロほど飛んだ排他的経済水域の海上――というよりは、日本の排他的経済水域と公海の境界といった方が正しいか。ＲＦ－４ＥＪのパイロットと偵察航法士は、キャノピー越しに見える光景に固唾を呑んだ。

そこには、どんな地図にも載っていない島があった。

パイロットは機体を左に傾け、旋回を開始した。早朝に操業中の漁船が発見したというその島の形は、崩れた三日月形。三日月の頂点には独立した小さな島も見える。頂点から頂点までは、十キロ弱といったところか。

「撮影開始するぞ」　パイロットは機体を水平に戻す。

「了解」　後部座席に座る偵察航法士は、機体下部に装備された偵察ポッドに収まっているＫＳ－１５３Ａ低高度偵察カメラを使用して、その島の写真を撮影し始めた。

空自の偵察機が撮影した画像を処理した偵察情報処理隊によると、Ｓ島の大きさは南北に八・五キロメートル、東西に六・七キロメートル。火山活動によって海底が隆起した洋島と考えられる。たった

一晩でこの大きさの島が出現したのは異常としか言いようがなく、原因は現在調査中。Ｓ島の地形はほぼ平坦だが、急激な変化や、水蒸気爆発の兆候は見られない。

位置は、五島列島から西南に４０８キロメートル離れた海上。ちょうど三日月を分断するようにＥＥＺ（排他的経済水域）と公海の境界線と重なっている。

Ｓ島の存在を知っているのは現在、日本だけと思われるが、時間がたてば他国も発見するのは必至であり、早急に政府の判断が必要と考えられる。

要は、そういう説明だった。内閣総理大臣の海原悟朗（うなばらごろう）を始め、各国務大臣はＳ島――ＳはＳｉｃｋｌｅ Ｍｏｏｎ（三日月）のイニシャルで、自衛隊が便宜上つけた名前だ――の説明を受けた。

「この場合、Ｓ島の領有権は日本にあると認識していいのかね？」

海原はスクリーンに映し出されたＳ島の航空写真を見ながら言った。

「難しいですね」　国交大臣の渡修輔（わたりしゅうすけ）が答える。「領海なら我が国に帰属することになりますが……。ＥＥＺと公海の間というのは前例がありません。しかし、最初に発見したのは日本の漁船ですから、普通に考えれば我が国の島かと」

「じゃあ、何が難しいんだね？」

「いるでしょう、図々しい国が。近くに」

「……韓国か。竹島問題もあるしな」

西潟勝己（にしかたかつみ）防衛大臣が立ち上がった。「Ｓ島から最も近い韓国の領土は、朝鮮半島の南にある済州（さいしゅう）島です」

「現在、済州島には韓国海軍の基地があり、独島（ドクト）級揚陸艦が配備されています」

「そのドクト級というのは、どのくらいの戦力を搭載できるんだ？」
「正確にはわかりませんが、兵員七百名、輸送ヘリ十機、戦車・装甲車合わせて二十六輌、エアクッション艇二隻と言われています」
「ほう。……で、S島を獲得した場合の利益はどうなんだね？」
「EEZの半径は二百海里ですので、韓国のEEZと重なる部分も考慮すれば、単純計算でざっと十万平方キロの水産・鉱物資源が得られます」
「価値は十分、か」
「それと……最悪の場合、北朝鮮や中国も出てくる可能性があります」
「もし、S島を巡って韓国や中国と戦闘になった場合、自衛隊は勝てるのか？」　海原は西潟を真剣な表情で見た。
「無血勝利できる……とは言い切れません」　西潟はそこで一呼吸おいた。「しかし、守りきれる自信はあります」
海原は「よかろう。いつまでも近隣諸国にナメられるわけにもいかんしな」　と言うと、立ち上がった。
「自衛隊の出動を許可する。S島を確保しろ」

午後五時、五島列島沖四百キロ。
第一空挺団の陸自隊員四十五人を乗せたC－1輸送機が、二機のF－15Jイーグル要撃戦闘機にエスコートされつつS島に向けて飛行していた。
「海原総理、なかなか思い切りがいいじゃないか」　C－1の貨物（ペイロード）

室で、川嶋宏一（かわしまひろし）等陸尉が隣の同僚に話しかけた。
「そうだな。前とは大違いだ」　松崎龍司（まつざきりゅうじ）一等陸尉が苦笑して返す。川嶋と松崎は防衛大の同期だった。

在日米軍基地問題で、日本の国際的信用を失墜させた前内閣に変わって発足した新内閣は、憲法九条改正に向けて本格的に準備を進めているという。この”Ｓ島問題”における自衛隊出動命令も、驚くほど迅速だった。

「それより、Ｓ（シエラ）島って安全なのか？　いきなり海に沈んだり、噴火したりしないだろうな……」　そう言った松崎の表情は、本当に心配そうだった。政府関係者はＳ（エス）島と呼んでいるが、自衛隊では無線での聞き間違いを防止するＮＡＴＯフォネティックコードを用いて、シエラと呼ぶのが通例だった。
「安心しろ。そのためにドライスーツを着てるんだろ？」　川嶋が微笑して返す。
「そんなもん、爆発には耐えられないだろ」
「まあまあ。ちょっと早い春のピクニックだと思えばいい」　穏やかな声で言った川嶋だったが、彼の持つ８９式小銃には、五・五六ミリ弾の実包が装填されている。

「もうすぐ降下だ。準備しろ」　宮内祥一郎（みやうちしょういちろう）三等陸佐が告げた。彼はいまＣ－１に搭乗している空挺隊員を統括する小隊長だ。「降下目標は全長十キロの三日月だ」

「ヘマして海に降下した者は自力でＳ島まで寒中水泳だ。覚悟しておけ」

冗談ではない以上、笑うに笑えない。松崎はフランス製Ｍ６９６Ｍ１落下傘のベルトを再確認した。

ほぼ、同時刻。海上自衛隊佐世保基地から、第六護衛隊のイージス護衛艦『ちょうかい』と汎用護衛艦『たかなみ』が、Ｓ島に向けて出港した。さらに、制空権確保のため第八航空団からＦ－１５Ｊが、早期警戒のため浜松基地からＥ７６７早期警戒管制機（AWACS）が、哨戒のため鹿屋（かのや）航空基地からＰ－３Ｃ対潜哨戒機がそれぞれ離陸した。

翌朝のニュースや新聞で、新しい島の発見は全国に報道された。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ：Ｓ島（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしています。

Ｐｈａｓｅ？：実戦

二月一日、午後五時。
Ｓ島上陸から、二十四時間が経った。地形がより平坦なＳ島北側にテントや通信機器などのベースを設置した松崎たちは、交代で歩哨に当たっていた。
とはいえ。
松崎は８９式小銃を肩に掛け、タスコ製の双眼鏡を覗く。数キロ先の海上を航行する海自のイージス護衛艦『ちょうかい』が見えた。午前中に到着した『ちょうかい』と『たかなみ』は、円を描くようにＳ島の周囲を航行しながら警戒に当たっている。
空に視線を向ければ、二機編隊で飛ぶ空自のＦ－１５Ｊや、海自のＰ－３Ｃオライオン対潜哨戒機の姿も見える。これだけの警備網なら、自分たちは必要ないんじゃないかとも思えた。

「なんつーか……殺風景だよなぁ」　隣に立つ川嶋がぼそりと言う。海底が隆起してできてから時間の経っていない島に、緑や砂浜が存在する道理はない。そこは、岩とも泥ともつかない、平坦なだけの土地だった。
しかし、あと二日経てば、陸自の普通科部隊だけでなく、いわゆる”工兵”である施設科部隊を載せた輸送艦『しもきた』が到着する予定だった。施設科が来れば、今の小型テントしかない環境もかなりマシになるというものだ。

「風呂がないってのが一番こたえる」
「確かに」　微笑してから、松崎は前方の『ちょうかい』を見てあることを思いついた。「護衛艦の入浴設備を使えりゃいいのにな」
護衛艦『たかなみ』にはＳＨ－６０Ｊシーホーク哨戒ヘリが搭載

されているし、あながち不可能でもない。

「それだよ！　あとで小隊長に具申してみよう」

「三佐が許すと思うか？」　鬼のあだ名がつく宮内三佐である。

「やってみなきゃ分からん」

「そうか……？」

松崎は再び『ちょうかい』を見た。敵が来なければ、つくづく暇な任務だった。

S島に関して韓国政府が発表した声明は、日本側の予想通りだった。

『最初にK島を発見したのは韓国空軍のパイロットであり、K島の領有権は韓国にある。日本がこちらの不意をついてK島を占拠したのは不法な行為であり、韓国政府としては非情に遺憾であることを示すとともに、日本政府に対しK島の引き渡しを要求する』

K島というのは、韓国側のS島の呼称だった。おそらくKOREAの頭文字だが、互いに違う名称を使うというのもややこしい話だった。

この韓国の声明には、不自然な点があった。空軍パイロットが日本の漁船より先にS島を発見したのに、二十四時間もそれをほったらかしにしたということだ。そんなことは普通有り得ないし、韓国側の『情報が錯綜して部隊の出動に手間取った』　という理由も胡散臭い。

日本国民の戦争アレルギーを考慮してか、声明の最後は『日本政

府が要求を拒否した場合、我が国は武力行使も辞さない』　という威嚇的な一文で締め括られていた。

これに対し日本政府が返したのは、『S島の第一発見者は日本の漁船乗組員であり、こちらにS島を引き渡す意思は全く無い。貴国が武力行使に及ぶというのなら、日本政府はそれを我が国に対する侵略行為とみなし、しかるべき処置をとる』　というこれまた挑発的な言葉だった。要約すれば「喧嘩を売るなら買ってやる」　ということである。

これまで”弱腰外交”がトレードマークだった日本政府の思わぬ変革に、韓国政府はどう対処するか。

日本の世論は、『三日月島を韓国に引き渡して平和的に解決すべき』　という主張と、『三日月島はれっきとした日本の領土であり、戦闘が起こっても守るべき』　という主張のふたつに分かれた。だが近年の不況続きで、国民としては経済活性化を渇望しているせいか、海原政権の”強気外交”の国民ウケは意外にも良く、後者が多数派だった。

ちなみに、S島がメディアでは”三日月島”として報道されたせいか、日本国民の間では三日月島の呼称が定着しつつある。

日没直後、空はまだうっすらと明るい。

S島上空を警戒飛行するF－15Jイーグルのコクピットで、岡崎祐二（かざきゆうじ）三等空尉は操縦桿を握っていた。

『レイ』　TACネームを呼ばれ、岡崎は僚機を見た。航空灯を点滅させるイーグルのコクピットで、エレメントリーダー（二機編隊長）の櫛田雷紀（くしだらいき）二等空尉がこちらに顔を向けていた。『エンジンの

調子はどうだ？』
「快調です、サンダー」
『そうか。……あまり気負うな。何があっても、訓練通り冷静にやればいいんだ』

岡崎は、Ｆ―１５（イーグルドライバー）パイロットになって二ヶ月の新人だった。櫛田は気を遣ってくれたらしい。『ラジャー』　と返し、操縦桿とスロットル・レバーを握り直した。
しかし……と岡崎は思う。撃てるだろうか。緊急脱出（ベイルアウト）が可能とはいえ、生存率は百パーセントではない。ミサイルを放てば、かなりの確立で相手のパイロットを殺すことになる。それ以前に、自分はまだファイターパイロットとして未熟だ。死ぬことよりも、櫛田や他の同僚パイロットの足を引っ張ることの方が恐い。
そんなことを考えていると、近くを飛行中のＡＷＡＣＳ（エーワックス）から通信が入った。韓国空軍機が接近中らしい。
来たか。岡崎は呼吸がわずかに苦しくなるのを感じた。

『Ｔａｒｇｅｔ　ｐｏｓｉｔｉｏｎ０－１－０．　Ｒａｎｇｅ３０，ａｌｔｉｔｕｄｅ１２．（目標方位０－１－０。距離３０ノーチカルマイル、高度１２０００フィート）』

その後、レーダーに捉えた。四機だ。

『Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ＴＨＵＮＤＥＲ，　ｐｏｓｉｔｉｖｅ　ｃｏｎｔａｃｔ．（こちらサンダー、レーダーで捕捉）』

すぐに、櫛田が警告を開始した。

『Ｔｈｉｓ　ｉｓ　Ｊａｐａｎ　Ａｉｒ　Ｓｅｌｆ　Ｄｉｆｆｅｎｓｅ　Ｆｏｒｃｅ．　Ｙｏｕ　ａｒｅ　ｖｉｏｌａｔｉｎｇ　Ｊ

apanese domain. Get out of Japanese domain.（こちらは日本国航空自衛隊。貴機は日本の領空を侵犯している。直ちに日本領空より退去せよ）』

敵機はＦ－１５Ｋが二機と、ＫＦ－１６Ｄが二機だった。岡崎と櫛田はその四機とすれ違ってから、急旋回してその後方についた。そして、櫛田機は手順通りに警告射撃を開始する。

数発おきに曳光弾（トレーサー）を装填した２０ミリ機関砲（バルカン）が火を噴き、暗い空にオレンジ色のラインを描いた。

しかし、四機は進路を変えずにＳ島へと向かった。

ほぼ、同時刻。

「韓国空軍機接近中！　四機編隊、方位０－１－０。三分で上空に到着します！」

Ｓ島沖二キロを航行中のイージス護衛艦『ちょうかい』の戦闘情報センター（ＩＣＣ）で、砲雷科の一等海曹が報告した。必要最低限の照明だけが残され、ディスプレイで埋め尽くされたＣＩＣに緊張が走る。

「艦長、指示を」　立ち上がった砲雷長が、隣の座席に座る艦長に言う。

「うむ……」　と艦長の波木英作（なみきえいさく）一等海佐は曖昧な返事をした。

『Ｓ島が攻撃されそうになった場合、空自と連携し全力で阻止せよ』

護衛隊群司令からの命令はそんな内容だった。海に出て二十七年。こんな命令は初めてだったし、無論実際に敵を攻撃するような事態

もなかった。とはいえ海外派遣で、いつ実戦になってもおかしくない状況というものは経験しているし、有事の心構えもしてきたつもりだった。

だが、実戦というのはこんなにも気分が沈むものなのか。波木は思う。旧帝国海軍の士官だった父も、戦うときはこんな気分になっていたのだろうか、と。映画のように高揚することもなければ、アドレナリンが湧き出ることも無い。それとも、それは守る対象が無人島だからか？　家族がいる土地を守る戦いではなく、資源獲得のための戦闘だからか？　そして、それは命を掛けてまで手に入れる価値のあるものなのか――？

ほんの数秒の思考だった。波木は艦内マイクをとり、スイッチを入れた。

「対空戦闘用意」

『Ｃｌｅａｒ　ｆｉｒｅ．（攻撃を許可する）』

『Ｒｏｊｅｒ．ＴＨＵＮＤＥＲ，ｅｎｇａｇｅ．（了解した。サンダー交戦開始）』

「ＲＡＹ，ｅｎｇａｇｅ．（レイ、交戦開始）」　岡崎はスロットルについた兵装スイッチを親指で操作し、短射程ミサイルにセットした。先に始末すべきは、空対地ミサイルを抱えたＦ－１５Ｋだ。スロットルの目標指示コントロールで左のＦ－１５Ｋをロックオン。そして、操縦桿の発射ボタンに指を乗せた。だが、ボタンに触れた親指が硬直した。

おれに殺せるのか――？

『どうした、レイ！？』　右のＦ－１５Ｋに向けて０４式空対空誘[AAM-5]

導弾を発射した櫛田の怒鳴り声だった。『早く撃て！』

撃つしかない。反射的に判断した体がボタンを押していた。櫛田が放ったＡＡＭ－５が命中したＦ－１５Ｋの爆炎が見えたが、櫛田の発射と同時に旋回したもう一機のＦ－１５Ｋは、フレアで岡崎が発射したＡＡＭ－５をかわした。

ミサイル発射後は、直ちに回避行動に移れ。座学や訓練で耳にタコができるほど聞かされた言葉が脳裏をよぎり、岡崎はイーグルを左に倒して旋回に入った。だが、急速反転してこちらをオーバーシュートさせたＫＦ－１６Ｄが、岡崎の後ろについていた。

警報が鳴り響く。ロックオンされた。体がかっと灼熱し、操縦桿を握る手に力が入る。

岡崎はＫＦ－１６Ｄを振り切ろうとイーグルを急旋回させたが、相手はぴったり後方に張り付いていた。

撃たれる。無条件にそう思ったとき、ロックオンの警報が止んだ。

後方を振り向くと、燃えながら落下するＫＦ－１６Ｄの破片が見え、こちらを助けてくれたらしい櫛田のイーグルが飛んでいた。

空自のイーグルが撃ち漏らした一機のＦ－１５Ｋが、真っ直ぐこちらに向かって来ていた。

「左、対空戦闘。ＣＩＣ指示の目標」

波木は怒鳴った。「スタンダード攻撃始め！」

「トラックナンバー・２００３、スタンダード発射！」砲雷長の指示で、『ちょうかい』艦橋構造物の前に設けられた垂直発射装置（ＶＬＳ）からＳＭ－２艦対空誘導弾（スタンダード）が発射された。全長四・五七メートルの

対空ミサイルはブースト段階を終えると、イルミネーターから目標に向けて照射されたビームの反射からコースを判断して飛翔した。
瞬く間に音速を超え、スタンダードは空対地ミサイルを発射する直前だったＦ－１５Ｋに命中した。
爆音とともに火球（ファイア・ボール）が膨れ上がり、パイロットと兵装操作員にベイルアウトする間を与えずＦ－１５Ｋは四散した。
だが、そんな光景は窓ひとつないＣＩＣからは見えるはずもない。艦長と砲雷科の隊員たちは、トラックナンバー２００３の輝点（ブリップ）がレーダー画面から消えるのを眺めるだけだった。

「トラックナンバー・２００３、撃墜。近辺空域に敵機なし……」
「対空戦闘、用具収め」　指示してから、砲雷長はスタンダードの発射ボタンを押した三等海尉の肩が震えていることに気づいた。「大丈夫か？」
その三尉は、震える右の掌を見つめたまま答えようとしなかった。砲雷長もそれ以上言葉を掛けようとはせず、三尉の肩に軽く手を載せ、顔を洗うためにＣＩＣから出た。

やがて、警戒飛行を交代するイーグルが飛来した。
『レイ、よくやった。帰還（ＲＴＢ）だ』
「すみませんでした、櫛田二尉……」　そう言ってから、岡崎はフライトスーツの内側が汗でびっしょり濡れていることに気づいた。
『誰もおまえを責めたりはしない。謝るな』
二機のイーグルは、築城基地の方向に機首を向けた。

暗いコクピットの中で、計器盤の上に取り付けられたＨＵＤ（ヘッドアップディスプレイ）を注視しながら、岡崎は両手がわずかに震えているのを知覚した。

なぜ震えているのか、岡崎本人にも分からなかった。

Ｐｈａｓｅ？：天空の鷲

「……冷や汗かいたぜ」　西の夜空を見上げたまま、川嶋が安堵のため息をついた。

韓国空軍機の飛来に、Ｓ島の陸自隊員たちは全員がテントの外に出て空を見上げていた。結果的には空自と海自の防空（エアカバー）は成功したが、もし空対地ミサイルの一発でも発射されていれば、松崎たちに対抗手段はなかった。手持ちの武器は、現状で小銃や軽機関銃、狙撃銃のみ。とてもじゃないが、戦闘機から放たれたミサイルを撃墜することは不可能だ。第一次派遣部隊を載せた輸送艦『しもきた』が到着するまでは、これだけの装備でなんとかする他ない。

創設されてから、半世紀と少し。この日、自衛隊は初戦を勝利で飾った。

二日後、海自の輸送艦『しもきた』が到着し、ＬＣＡＣ（エルキャック）（エアクッション艇）による各種装備の揚陸が開始された。最大積載重量七十トンを誇るエルキャックがピストン輸送により次々と車輌をＳ島へと運ぶ一方、真っ先に陸揚げされた施設作業車はすぐに整地作業を開始する。コンピュータ制御された施設作業車が、ドーザーブレードとショベルアームを駆使して効率的に作業を進めていき、岩のような硬い障害物はプラスチック爆薬で爆破。そうして整地は迅速に進み、夕方にはテントが並び、距離を置いて地対空ミサイルの陣地も三ヵ所完成した。

ずらりと並ぶオリーブドラブ色のテントに隣接して、１０式戦車や８９式装甲戦闘車を始めとした車輌が整然と佇んでいる。Ｓ島の地面状況を考慮してか、装軌車輌が多めに感じられる。

「やっと宿営地らしくなってきたな」　複合装甲によって角ばった外見を持つ１０式戦車を見上げながら、川嶋が言う。「これで、三日ぶりにまともなメシが食べられる」
「そうだな」　と応じつつ、松崎は７３式大型トラックの後方にリヤカーよろしく接続された野外炊具１号に視線を向けた。８９式小銃を背中に掛けた隊員たちが、すでに夕食の準備を始めていた。

『しもきた』がＳ島に運んできた第一次派遣部隊は、普通科隊員約二百名、野戦特科など普通科以外に約百名。装備は１０式戦車二輌、８９式装甲戦闘車など装甲車輌四輌、０３式中距離地対空誘導弾の搭載車輌、それに付随する戦闘指揮車輌、射撃レーダー搭載車輌、電源車輌、運搬・装填車輌、その他トラック多数。二週間分の食料・弾薬など補給品。そして、ＡＨ－６４Ｄアパッチ・ロングボウ戦闘ヘリが一機、ＣＨ－４７Ｊチヌーク輸送ヘリが一機。
戦車や装甲戦闘車を使用するような状況になる可能性は低そうだが、中距離地対空誘導弾（中SAM）など対空用の装備があるのは心強い。
今晩は熟睡できそうだ。松崎は夕陽を眺めながら、心中にそう呟いた。

翌朝。福岡県にある築城基地に配備されている第八航空団の飛行隊に、出動命令が下された。韓国海軍の戦闘艦隊が南下を開始し、航空部隊もＳ島に向けて飛行しているという情報だった。とりあえず、第３０４飛行隊からＦ－１５Ｊ四機をＳ島に向かわせることになった。
ブリーフィングルームで状況の説明があり、出撃する四機のメン

バーが発表された。櫛田はそのメンバーに含まれていたが、岡崎は名前を呼ばれなかった。
岡崎は飛行隊長の二佐に歩み寄る。「おれも行かせて下さい」
「ダメだ」　やっぱり不服か、とでも表情で言っている二佐は、きっぱり首を横に振った。「おまえは待機していろ」
「なぜです！？」
二佐は立ち上がり、「これは命令だ」　とだけ言い残してブリーフィングルームから出て行った。これ以上何を言っても聞いてくれないと悟った岡崎は、思わず呟いていた。「こうなりゃ直談判だ……！」

「赤月一尉！」　岡崎は、灰色の航空ヘルメット片手に廊下を歩くフライトリーダー（四機編隊長）に駆け寄った。「おれも行きます！」
「おまえはまだ、この前の戦闘の疲労がとれていない」　こちらを振り向いた赤月真希一等空尉が言った。口調からは想像もできない、美人の部類に入れても差し支えない顔立ちの赤月だが、瞳だけはいつも冷徹さを含んでいる。
「三日前の疲労なんて無くなってますよ！　なんで櫛田二尉が行くのにおれがメンバーから外されるんですか」
「身体的な疲労じゃない。精神が立ち直ってないだろう？」　下斜め三十度からの無表情な顔が返してきた。
一瞬言葉に詰まってから、岡崎はまっすぐ真希の顔を見た。「あんなミスをしたままじゃいられません」

「ＡＡＭ発射をためらったのは確かにミスだが、仕方がないことだ。初めての実戦だったんだから、もしわたしでも同じことになっていたかもしれん」　同じようなことを、同僚のパイロット数人からも言われていた。

「おれ自身は納得できません！　今度はミスで失った分まで取り戻します！」

「あんなのは恥でもなんでもない。気にするな」　そう言った空自初の女性戦闘機パイロットは、わずかに困ったような顔をしていた。

「もしこのまま挽回できなければ、おれはイーグルから降ります」

「……本気か？」　真希は驚いたように岡崎を見上げた。

言うことは言った。岡崎は真希が言葉を発するのをを待った。ぐっと詰まった顔をしてから、真希は俯き、ため息をついた。「……おまえには負けた」

「おい坂城（さかき）！　岡崎と替われ！」　廊下を走っていたパイロットに怒鳴ってから、真希はきょとんとしている岡崎に向き直った。「何をしている」

「さっさとＧスーツを着て来い。遅ければおまえだけ置いてくぞ」

一瞬だけ無表情を崩して笑顔を見せ、真希はすぐに岡崎に背を向けて走っていった。

Ｓ島近海には、海自の艦隊が集結しつつあった。『ちょうかい』『たかなみ』だけでなく、『しもきた』とほぼ同時に到着したイージス艦『あしがら』を含む第二護衛隊群の護衛艦四隻と、ミサイル艇『おおたか』。海中では潜水艦『そうりゅう』、『いそしお』が

潜航していた。『しもきた』にも武装はあるといえばあるが、個艦防御用の近接防御火器（CIWS）が二基あるのみで、実質的に戦力にはならない。

韓国海軍の艦隊が南下中という連絡が入ったのは、午前六時のことだった。

「敵艦隊、方位２－９－０、距離１２９マイル。世宗大王（セジョンデワン）級イージス駆逐艦以下六隻を確認。上空には戦闘機部隊、機数四十五。現速度なら約四分で上空到達」

『ちょうかい』の艦橋からＣＩＣに降りてきたばかりの波木は、砲雷長に問うた。「空自の出動状況は？」

「現在Ｓ島上空にいるのは警戒飛行中の二機ですが、築城基地、新田原（にゅうたばる）基地、小松基地、那覇基地から合計十六機の要撃機が離陸しました。築城では対艦ミサイルを搭載した支援戦闘機が待機中です」

済州島の西側から南下してきた韓国艦隊は、着実にこちらとの距離を縮めてきていた。しかし、対艦（ハープーン）ミサイルの射程に入るまでには時間がある。問題は航空部隊だ。

戦闘機の数の上では、空自が圧倒的に不利。しかし、戦闘空域が海自艦隊の上空である以上、こちらはイージスの能力を存分に発揮することができる。

「制空権を奪われるわけにはいかん。まずは敵航空部隊を叩く」

「了解」　砲雷長はヘッドセットを付け直した。

「両舷前進原速、赤黒なし。対空戦闘用意」　波木の指示で、『ちょうかい』の乗員たちは慌しく戦闘配置についていった。

「敵航空部隊、領空侵犯中！」

「スタンダード攻撃用意。五発だけ撃つぞ」　砲雷長が指示する。

「スタンダード、発射用意よし」

「発射始め！」

Ｓ島上空に到着した直後だった。イーグルの操縦桿を握る岡崎は、海上に浮かんでいる護衛艦二隻から、白い筋が昇っていくのを見た。対空ミサイルだ。

『海自の第一次攻撃が終わり次第、交戦に入る』　真希の声が言った。『敵機はこちらの三倍近い数だ。油断するなよ』

レーダーに映った韓国空軍機が、ミサイルの接近を察知して散開していく。対艦ミサイルを抱えたＦ－１５Ｋは高度を下げ、海自艦隊に近づく。Ｆ－１６はこちらに接近してきた。

Ｆ－１５Ｋは海自のイージスに任せるとしても、機数で言えばこちらが不利だ。しかし、三十分もすれば増援のイーグルやＦ－２支援戦闘機も到着する。それまで持ちこたえる自信はあった。

最も近いＦ－１６をロックオン。やがて、計器盤左上の垂直状況ディスプレイ（ＳＤＶ）に射程内（インレンジ）のメッセージが表示された。

迷いはなく、岡崎は右手親指で操縦桿にある発射ボタンを押した。

胴体下面側部に取り付けられた全長三・七メートルのＡＡＭ－４が発射され、目標との間の十八キロメートルをわずか十数秒で消化した。電波妨害排除能力（ＥＣＣＭ）ではアメリカ製のＡＩＭ－１２０を上回ると言われる国産のＡＡＭ－４は、回避行動をとったＦ－１６を逃すことはなく、音速の五倍の速度で命中した。

右主翼の付根付近に命中したＡＡＭ－４の弾頭が炸裂し、Ｆ－１６の機体を火に包んで引き千切る。揚力を失った個々の破片は空中に留まることを許されず、金属の塊となって海に落ちていった。

そうして数機の僚機が墜ちていく中、生き残った機体は空自のイーグルに向けて中射程ミサイルを発射した。しかし、その数秒後には海自の第二次攻撃によって発射されたスタンダードの雨が降り注いできていた。

韓国空軍機が中射程ミサイルを発射したことを確認した岡崎は、急旋回してチャフをばら撒いた。アルミが蒸着されたフィルムがミサイルの電波を欺瞞し、岡崎はミサイルをかわすことに成功した。不思議と、三日前のような極度の緊張感と焦りはなかった。

キャノピー越しに周囲を見回す。斜め前方に櫛田のイーグルが見えた。後方にミサイルが迫っている。

『サンダー、ＡＡＭだ！　振り切れ！』　真希の声だった。

『やってますよ……！』　急旋回の重力加速度に耐えながら紡ぎ出された声は、苦しげだった。

おそらく、逃げ切れない。岡崎は怒鳴った。「脱出して下さい！」

返答はなく、ＡＡＭは櫛田機の尾翼付近に命中し、次の瞬間にはイーグルは四散した。一瞬ひやりとしたが、命中の直前に櫛田がベイルアウトしたのを岡崎は見ていた。

海上にパラシュートで降りれば、すぐ海自に救助してもらえるだろう。

前方に視線を戻せば、敵部隊が接近してきていた。しかし、海自によるスタンダードの波状攻撃で、その数はすでに三分の二にまで落ち込んでいた。

岡崎の駆るイーグルは、すぐに次の目標をロックオンしていた。

Ｐｈａｓｅ？：それぞれの戦い

Ｓ島防衛艦隊の旗艦となっているイージス護衛艦『あしがら』のＣＩＣで、艦隊司令の澤口洋二郎（さわぐちようじろう）海将補はレーダーディスプレイを眺めていた。

高性能防空システムであるイージス・システムの要ともいえる、艦橋構造物に備え付けられた四面のフェーズド・アレイ・レーダーは、接近してくるＦ－１５Ｅ三十機を捉えていた。

「次の第三次攻撃で、スタンダードは撃ち尽くします。あとは短射程（シースパロー）ミサイルで対処するしかありませんが、本艦と『ちょうかい』のみで艦隊すべてを防空するのは難しいかと」　艦長の滝沢剛史（たきざわたけし）一等海佐が澤口に言った。

「わかった。イージスで撃ち漏らした場合は、各艦独自に対空戦闘を実施するよう連絡しろ」

そんな会話が『あしがら』ＣＩＣで交わされていた上空では、真希の駆るイーグルが一機のＦ－１６をロックオンしていた。

左右に急旋回して逃げようとするＦ－１６の後ろ姿をＨＵＤ越しに眺めつつ、操縦桿とスロットルを巧みに操作してイーグルをＦ－１６に追随させる。

フライ・バイ・ワイヤを搭載した米国製高性能機にしては、やけに動きの悪いＦ－１６だった。

実戦で実力が出せないのか、連度不足なのか。まさか、訓練生が飛ばしているんじゃないだろうな。

心中に吐き捨ててから、ミサイルの発射ボタンに指を乗せたが、

やめた。
イーグルに搭載できるミサイルは、八発。無駄遣いはしたくない。真希はスロットルの兵装スイッチを後ろにずらし、機関砲に切り替えた。
ＨＵＤのレティクルをＦ－１６に合わせ、右の人差し指でトリガーを引く。
右主翼の付け根に装備されたＭ６１Ａ１バルカンが火を噴き、毎分六千発の連射速度で２０ミリ機関砲弾が発射された。この連射速度に対して、イーグルの装弾数はわずか９４０発。十秒足らずで撃ち尽くす計算になる。
真希はすぐにトリガーから指を離した。撃っていたのは二秒だけだ。
垂直尾翼と水平尾翼、そしてエンジンに被弾したＦ－１６は速度を落としつつ降下していった。やがて、キャノピーが弾け飛ぶとともにパイロットがベイルアウトするのが見えた。
真希はキャノピー越しに周囲を見回した。「レイ、無事か？」

『ええ。そっちはどうです、エレン？』　その岡崎の言葉に、真希は違和感を覚えた。
「……無事だ」

これまでは、無線で話し掛けても返事をするだけで、こんな風に聞き返してくることはなかった。
だが、真希が違和感を覚えたのは、岡崎にＴＡＣネームで呼ばれたからではなかった。
余裕のある、落ち着いた口調。自信に満ちた声色。岡崎のこんな声は聞いたことがない。
確かに、岡崎は優秀なパイロットだ。航空学生での成績は最優秀だったし、戦技訓練・射撃訓練でも急速な成長を見せている。飛行隊内でも、次期エースパイロットを有望視されているほどの腕前だ。

しかし、戦闘訓練ではいつも緊張していて、必死で、余裕を見せたことはなかった。それなのに、この落ち着き方はなんだ？　実戦が彼を変えたというのか？

『敵機の後方につきました。撃墜します』

「レイ……死ぬなよ」

『もちろん』

いい気分だった。イーグルが、まるで自分の身体の一部であるかのように反応してくれる。

岡崎は、大空を自由に舞っているということを実感していた。

ＨＵＤに捉えていたＦ－１６が、ブレイクしてから反転に入る。急旋回し、こちらも反転。Ｇスーツに空気が充填され、下半身を締め付ける。もしこれが無ければ、脳内血圧が低下してパイロットは失神してしまう。

相手は、反転を続けて敵をオーバーシュートさせるシザーズ戦法をとった。

なかなかいい腕前じゃないか。岡崎は声に出さず呟いて、操縦桿を握り直した。

後方についたＦ－１６が、岡崎のイーグルをロックオンする。コクピットに警報が鳴り響く。

岡崎は操縦桿を右に倒し、手前に引いてブレイクした。上方に抜けたＦ－１６がオーバーシュートすると同時に、右旋回から左への横転に入り、敵機の後ろにつく。

戦技でいうところのハイＧバレル・ロールを実施した岡崎は、完全に捉えたＦ－１６から視線を外さなかった。

発射ボタンを押すと、主翼のパイロンからＡＡＭ－５が発

射された。
ブースターに点火した０４式空対空誘導弾は、最高速度のマッハ３に達する前にＦ－１６のエンジンノズル付近に命中し、弾頭を炸裂させた。
まずエンジンが爆発し、機体後方は一瞬で四散した。続いて主翼内の燃料タンクも誘爆して火球を生じさせ、両翼を失った機首部分が惰性で直進した。慌ててパイロットがベイルアウトし、残った機首部分は部品を落下させつつ海面に激突し、水しぶきを上げた。
その上空を、旋回に入った岡崎のイーグルが５００ノットで駆け抜けた。

「Ｆ－１５Ｅから空対艦誘導弾（ＡＳＭ）発射！　左三十度、二発！」　対空レーダー員が怒鳴る。
「左、対空戦闘。シースパロー攻撃始め」　波木の指示で、砲雷長が言った。「目標、ＡＳＭ及びトラックナンバー３０４４。シースパロー撃ち方始め！」
ミサイル員が発射ボタンを押すと、『ちょうかい』のＶＬＳから四発のシースパローが発射された。ＭＫ５８固体燃料ロケット・モーターに点火した全長三・六六メートルのシースパローは、二発がＡＳＭに向かい、もう二発はＦ－１５Ｋに向かった。
「インターセプト五秒前。……スタンバイ……マークインターセプト」
海面すれすれを飛翔するＡＳＭは、一発がシースパローによって

迎撃されたが、もう一発はシースパローをかわしてホップアップに入った。上昇してから目標艦に接近し、四十五度の俯角で甲板を突き破るのが対艦ミサイルの着弾プロセスだ。

「目標一発撃墜。もう一発がさらに接近！」
「主砲攻撃始め」　波木が言う。
「主砲、撃ち方始め！」

砲雷長が怒鳴った直後、『ちょうかい』艦首に設置されたオットー・メララ１２７ミリ単装速射砲がＡＳＭの方角に旋回し、照準を合わせた。砲塔下部のマガジン・ドラムから１２７ミリ弾が自動給弾され、毎分四十四発の発射速度で発砲を開始する。
轟音とともに砲身が後退し、砲塔から薬莢が排出されていく。
四発目で、ＡＳＭを撃墜した。『ちょうかい』の左舷側で火球が膨れ上がり、艦体が大きく揺れた。

「目標撃墜！　トラックナンバー３０４４も撃墜した模様」
「損害報告せよ」
「艦橋見張り員二名が負傷。いずれも軽傷です。戦闘システムに影響なし」
「よし。……油断するな。対空見張りを厳となせ」　波木は深呼吸した。「他の艦はどうなっとる」
「いまのところ、大規模な損害はありません」

すると、対空レーダー員が叫ぶように言った。「『はるさめ』にＡＳＭ二発接近！　着弾まで十五秒！」
砲雷長がレーダーディスプレイを見る。波木もそちらに視線を向けた。

『ちょうかい』の後方を航行する汎用護衛艦『はるさめ』に装備された76ミリ単装速射砲が火を噴く。『ちょうかい』に搭載された127ミリ砲よりも速い、毎分八十五発の発射速度で76ミリ弾が撃ち出されていった。

「目標一発撃墜！　もう一発がさらに突っ込んで来る！」　『はるさめ』のCICで、対空レーダー員が怒鳴った。

「チャフ発射！」「間に合わない！」

「CIWS、AAWオート！」

艦橋のすぐ前方に装備されたレイセオン製ファランクス近接防御火器（CIWS）が作動する。レーダーや火器管制システム、バルカン砲を一体化したCIWSがASMを捉え、20ミリ機関砲の発砲を開始した。乾いた音を立てて六本の銃身が高速回転し、毎分4500発の連射速度で86式徹甲弾を撃ち出す。

「着弾五秒前！」

「総員、衝撃に備え！」　全員が身構えた。数秒後、CICを轟音と激しい振動が襲った。

着弾わずか一秒前になってCIWSに撃墜されたASMは、爆発とともに衝撃波と破片を撒き散らした。艦橋構造物の左すぐ近くで爆発した直後、艦橋の風防は全て割れ、爆風が艦橋内の隊員たちに襲い掛かった。

「命中したのか！？」　艦長が怒鳴る。

「いえ、迎撃成功しました！」

「被害を報告しろ！」
「ＡＳＭ、艦橋近くで爆発。水上レーダー（ＯＰＳ－２８Ｄ）が故障した模様！　左舷電子戦装置（ＮＯＬＱ－３）も異常発生！」
『艦橋よりＣＩＣ。航海科員に負傷者多数！』
「なに！」　艦長は怒鳴り返した。「大丈夫なのか！？」
『こちら航海長……』　咳き込んでから、航海長は続けた。『航行には支障ありません。しかし……』

その続きを聞いて、艦長は背筋が凍るのを感じた。

「大丈夫か！？」　『はるさめ』の艦橋から左右に張り出したウイングに飛び出た掌帆長が怒鳴った。

一人の見張り員が、倒れた隊員に何か怒鳴っていた。掌帆長はその肩をつかむ。「おい、どうした！」
「掌帆長……」　若い海士長が振り向く。彼の顔に血が流れていた。
「ミサイルの破片が……！」
ウイングの床には血が溜まり、三人の見張り員が崩れ落ちていた。

戦闘開始から約二十分。護衛艦のミサイル攻撃と空自との戦闘により、半数を失った韓国空軍の戦闘機部隊は、Ｕターンして日本の領空から退去していった。
韓国空軍はこの戦闘で、戦闘機二十二機を失った。対して空自の損害は、イーグル二機のみ。しかもこちらは、パイロットは二名ともベイルアウトに成功したため死者は皆無だった。

『そろそろ帰投（ビンゴ）限界燃料量です。一度築城に戻りましょう』　部下の声に、真希は「分かった」　と答え、イーグルの機首を北東に向けさせた。

真希にとっては、初の実戦だった。今日、二機を墜とした。一機のパイロットはベイルアウトしたが、もう一機のパイロットは機体とともに散った。そのとき、見間違いかもしれないが、空中に千切れた人間の腕のような物が見えた気がする。

この手が、人を殺した。真希はＨＵＤから視線を下げ、操縦桿を握る右手を見た。

殺人罪には問われないとはいえ、これも殺人のカテゴリーに入るのだろうか。

よく分からないことを考えてから、真希は航空ヘルメットのバイザーを上げた。昔から好きだった大空が、視界一杯に広がっていた。青い空と、白い雲。それが好きで、パイロットの道を選んだ。

なのに……。

裸眼視力２．０の真希の目にはっきり見えていた積乱雲が、滲み始めていた。歯を食い縛ったが効果は無く、真希はコクピット内で嗚咽していた。

「敵艦隊との距離、９４マイル……あと数分で、韓国海軍が保有する対艦ミサイルの射程に入ります」

滝沢が告げ、澤口は腕を組んだ。

「『はるさめ』より報告！」

「どうした」

「先ほどの対空戦闘で、水上レーダーと電子戦装置が破損し、水上戦闘は困難。それと……ミサイルの破片が直撃し、見張り員三名が死亡。重傷者も数人出たようです」
「なんだと……！」　澤口が怒鳴ったあと、ＣＩＣはしばし沈黙に包まれた。

「……とうとう殉職者が出たか」　覚悟はしていたが、実際に報告されると気が沈む。澤口は目を閉じた。「なぁ、艦長」
「はい」
「これは、戦死か？」
「……法的には、作業中の事故死ということになるかと」

澤口は目を開け、座席から立ち上がった。「『はるさめ』は佐世保に戻せ」

「三名の仇を討つ。水上戦闘用意！」

あれを使うのか。砲雷長は固唾を呑んだ。先月、試験配備されたばかりの巡航ミサイルが、この『あしがら』には二発のみだが搭載されており、その射程はハープーンをはるかに上回る。そんな代物が、こんな所で役に立つとは。
「巡航ミサイル（トマホーク）発射用意。発射弾数二発。目標、韓国艦隊セジョンデワン級駆逐艦」
「トマホーク、発射用意よし」　ミサイル員が告げた。
「攻撃始め！」

ＶＬＳから発射されたトマホークは、推進を固体ロケットブースターからターボファンエンジンに切り替え、巡航を開始した。しかし今回は、射程２８５マイルを誇るトマホークにとってはわずかな

距離の目標でしかない。
トマホークは海上を時速８８０キロで飛翔し、着実に目標との距離を詰めていった。

Phase?：上陸

韓国海軍のイージス駆逐艦『セジョンデワン』艦内では、日本艦隊に向け対艦ミサイルの発射準備を行っていた。

「対空レーダーに感！　日本のイージス艦からミサイルが発射されました！」

「なんだと？」　突然の報告に、『セジョンデワン』の艦長は思わず確認した。「誤認じゃないのか？　自衛隊にはこの距離まで届く対艦ミサイルは装備されてないはずだぞ」

「しかし……まっすぐこちらに向かってきます。速度からして、おそらく巡航ミサイルではないかと」

「馬鹿な……」　自衛隊が巡航ミサイルを装備しているはずがない。多少混乱した頭で、艦長は指示を出した。「迎撃だ！　シースパロー発射準備急げ」

迎撃のために発射されたシースパローはトマホークと正面から衝突し、爆音を轟かせ、巨大な火球を海上に生じさせた。約十秒の間をおいて発射されていた二発目のトマホークは高速でその火球を突き抜け、『セジョンデワン』に向けて驀進（ばくしん）した。

『セジョンデワン』からは5インチ砲やゴールキーパーＣＩＷＳも発砲されたが、トマホークは砲弾の雨をくぐり抜けた。

『セジョンデワン』の左側に命中したトマホークは、艦体を突き破ってその内部に入り、爆発と共に衝撃波と爆炎を撒き散らした。ＣＩＣや居住区画の一部は一瞬で炎に包まれ、やがて引火したエン

ジンが爆発すると、艦底から浸水が始まった。乗員たちの消火作業もむなしく炎は消えず、復旧不可能なほど開いた艦底から大量の海水が流れ込む。命中直後に死んだ艦長に替わって副長が総員退艦を下命し、傾いた艦から救命胴衣を装着した乗員が海に飛び込み始めた。

　僚艦の一隻が速度を落として内火艇を降ろし、救助作業を始める一方、第一煙突の付け根から黒煙を上らせる『セジョンデワン』は傾斜を徐々に大きくし、やがて冷たい海に呑み込まれた。

「トマホーク、一発目が撃墜されました！　二発目、着弾まで十五秒！」

　『あしがら』のＣＩＣで、対空レーダー員が告げた。澤口や滝沢たちはレーダーディスプレイを注視する。

「残り五秒！」　ディスプレイ上で、トマホークを示すマークが『セジョンデワン』のマークに接近していく。「着弾！」

　『セジョンデワン』のマークが数回点滅し、やがて消えた。弾頭重量４５０キロのトマホークは、命中すればほぼ確実に目標艦船を葬る。

「すぐに対艦ミサイル（SSM）が飛んで来るぞ。戦闘配備を維持し、対空見張りを厳となせ」

「司令」　通信員が澤口に告げた。

「どうした」

「先ほど、『そうりゅう』より連絡があり、Ｓ島南西６マイルの海

中にて韓国海軍の潜水艦を発見。音紋解析より、艦種は２１４型通常動力潜水艦『鄭地（チョン・ジ）』と判明。西に向かっており、現在『そうりゅう』が追尾中です」
「なに……？」
「そんなに接近されたのか！？」　唸った澤口の隣で立ち上がった滝沢が怒鳴り声を上げた。「いったい航空隊はなにをやっとるんだ。対潜哨戒機（Ｐ－３Ｃ）をあれだけ飛ばしておいて……！　いますぐ『そうりゅう』には魚雷攻撃命令を……」
　大声でまくしたてた滝沢を澤口が制した。「いや。『そうりゅう』には追尾を継続させろ。領海から大人しく出て行くようなら見逃してやれ」
「艦長、そこまで接近されていたということは……」　砲雷長が眼鏡越しの視線を滝沢に向けた。
「潜水艇でｓ島に接近、か」

　特殊部隊を潜水艦に乗せてｓ島に接近させ、小型潜水艇で上陸――澤口は悪寒を覚えた。

「陸自の指揮官に連絡。ｓ島南西部の警戒を強化するよう伝えろ。それと、Ｐ－３ＣをＳ島南部にも向かわせて音響探知機（ソノブイ）を投下するよう連絡しろ」
「了解！」

　陸自は戦闘ヘリも持ってきているし、もし特殊部隊に上陸されてもなんとかなるだろう。澤口はひとつ息をついて、接近中の韓国艦隊をどうするかに思考を切り替えた。

ほぼ、同時刻。S島南部では、陸自の一個小隊、二十二名が塹壕を掘っていた。昨晩、輸送(チヌーク)ヘリで天幕や通信機、食糧などと共にこのS島の南の端に配置された二十二名は、警戒と塹壕作りという二つの仕事を任せられていた。

島の端に部隊が配置されるのは、南と東の二箇所。それぞれ一個小隊が差し向けられ、一日おきのローテーションということになっている。簡易天幕で一夜を明かした彼らは、早朝から塹壕掘りに精を出していた。

「……一体何なんすか、この殺風景な島は。こんなとこに何日もいたら退屈死しますよ」　地面に円匙(えんぴ)（シャベル）を突き立てながら、若い陸士長がぼやいた。

「確かに、ここまでなんも無い場所だとはな……」　隣で班長の三等陸曹が応える。

「黒川ァ！」　小隊長の怒声が弾けた。いきなり名前を呼ばれた陸士長が肩をびくりと震わせて振り返ると、十メートル向こうで小隊長の二等陸尉が不機嫌そうな顔で立っていた。「89式は常に肩に掛けておけと言ったはずだぞ！」

陸士長は「すみませんでした！」　と怒鳴り返し、すぐ近くに置いてあった89式小銃を負い紐(スリング)で肩に掛けた。

「こまけぇなぁ、小隊長……」

ぼそりと呟いた陸士長に、三曹は苦笑する。「ま、用心しとくに越したことはないけどな」

「っていっても、ここにいたって襲撃されたりなんかしませんよ。海自が睨み効かせてるんですから」

「海自の対潜哨戒能力は世界有数っていうしな。……そういやおま

え、結婚相手決まったって？」

話題を変えた三曹に言われ、陸士長はしまりのない笑みを浮かべた。「バレちゃってました？」

「この任務終わったら、結婚するんです。死んでも成仏できませんよ」

――嫁さん、泣かせるなよ。そう言おうとした三曹の声は、実際の声として結実することはなかった。突如飛来した小銃弾に喉を貫かれた三曹は、首と口から血を吐いて前のめりに倒れた。返り血を浴びた陸士長は、咄嗟に塹壕の中で伏せた。「く、蔵丘（くらおか）さん……！？」　三曹の名前を呼んだが、彼はもう微動だにしていなかった。

銃声が聞こえていた。陸士長は伏せたまま８９式を握り、弾倉を確認してコッキングレバーを引いた。耳を澄ませ、敵の方向を探る。どこだ、どこにいる……！？

死んでたまるか。知り合ってから九ヶ月目にして、やっと結婚の承諾を得た相手の顔が脳裏をよぎった。震える指でセレクターレバーを操作し、三点制限連射（スリーバースト）にセット。

少しして、前方に迷彩服ではない黒い戦闘服が見え、陸士長はトリガーを引いた。８９式から吐き出された三発の五・五六ミリ弾が戦闘服の首筋に命中し、血の煙を生じさせた。戦闘服――韓国海軍特殊部隊の隊員は、即死して倒れた。その手にはＨ＆ａｍｐ；ＫＭＰ５ＳＤ短機関銃（サブマシンガン）が握られている。

その仲間の足音が接近し、姿が見えた瞬間に陸士長は再びトリガーを引いた。しかし、弾は出なかった。

慌てて８９式の機関部を見ると、空薬莢が引っ掛かって弾詰（ジャム）まりを起こしていた。残弾確認用にマガジン側面に空けられた穴から泥が入り、弾と一緒にチャンバーに送られた結果だった。

舌打ちする暇も無かった。正面にあったのは、黒ずくめの特殊部隊員の姿と、こちらを向いたＭＰ５ＳＤ。その銃口が光を放った刹那、陸士長の意識は途絶えた。

「南の第二小隊との連絡途絶！」
「西側の第三小隊は？」
「駄目です。無線応答なし」
「アパッチの整備はできてるな？　準備でき次第離陸させろ」
「了解！」
「いったいどうなってるんだ？　敵が上陸したのか？」
「分かりません。アパッチから確認するしか……」

指揮所では怒号が飛び交っていた。第一空挺団の宮内三佐は、第一次派遣部隊長の越村一佐に歩み寄る。「状況は？」

「西と南に配置した二個小隊が無線に応答しない」
「海自から、潜水艦が接近していたという情報がありましたしね。十中八九、特殊部隊に上陸されたと見て間違いない」
「無謀すぎないか？　こちらは戦車まで持ってきているんだぞ」
「時間稼ぎか、陽動が目的でしょう」

そのとき、指揮所に駆け込んできた隊員が怒鳴った。「アパッチはエンジントラブルにつき、離陸不能です！　整備に三十分はかかるそうです」

「なんだと！」
「……仕方ありません、我々がチヌークで向かいます」

「分かった、よろしく頼む」
「では」　宮内は敬礼して踵を返し、指揮所を出た。

出動の命令で、松崎と川嶋は歩哨から本部に戻るや否や、エンジン・スタートして待機していたチヌーク輸送ヘリに搭乗した。直後にチヌークはローター・ピッチを変えて地面にダウンウォッシュを叩きつけ、南に向けて飛行していった。

Phase?：殲滅

「まもなく、第二小隊の展開ポイントです」

パイロットが告げ、第一空挺団の隊員たちはチヌークの丸窓に身を寄せた。

直後、機内に鈍い金属音が響いた。銃撃だ。

「二時の方向に敵らしきもの視認！」

下方に黒い人影が距離をおいて展開しているのが見えた。遮蔽物がないためよく見える。ざっと十五人はいる。陸自隊員が掘っていた塹壕も見え、その周囲には倒れた人の姿が見えた。

「二百メートルほど後退した地点で降ろしてくれ」　宮内三佐がパイロットに告げた。

「了解、１８０度旋回します」

高度を下げたチヌークから隊員たちがファストロープで降下し終わると、チヌークは野営地の方角に飛び去った。

「なるべく姿勢を低くしろ。ヘッドショットを食らうぞ」

宮内の指示で、小銃を携えた十七名の隊員たちが一定の距離をとって前進を始めた。

「小笠原と武山はここに残って狙撃しろ」

「了解」　二人はそれぞれＭ２４　ＳＷＳ対人狙撃銃のバイポッドを展開し、狙撃姿勢を取った。

その頃、野営地では１０式戦車と８９式装甲戦闘車に乗員が搭乗し、エンジンがかけられた。１０式戦車は、名前の通り２０１０年に制式採用された戦車で、９０式戦車の後継として開発された。五十トンもの重量だった９０式より六トンほど軽量化され、Ｃ４Ｉシステムを搭載したため戦闘の効率も良くなっているが、調達価格は相変わらず高く、配備は延々として進んでいない状況だった。

８９式装甲戦闘車は一見、戦車に見えるが、れっきとした装甲車である。腹に普通科隊員七名を呑み込み、３５ミリ機関砲と７９式対舟艇対戦車誘導弾を備え、戦車に随伴する。

二輌はディーゼルエンジンの轟音を響かせながら、チヌークが向かったのと同じ方角に進路を定めた。

トリガーを引く。８９式小銃がフルオートで５．５６ミリ弾を射出し、黒い戦闘装備に身を包んだ男の首から鮮血が散った。松崎は新しいマガジンを８９式に叩き込み、近くにいた川嶋に近づいた。

「おい、おかしくないか？」

地面に伏せ、８９式を構えていた川嶋は「確かに。敵が多すぎる」と返した。

先刻、チヌークから見たときには十数人しかいなかったが、今戦っている相手はもっと多い。二十人はいる。

「塹壕に隠れていたのかもしれん。アパッチが来るまで持ち堪えないとな」

？？　松崎が８９式を構え直すと、ヘリの羽音が耳に入って来た。

？？　遮蔽物のないＳ島では、ヘリからの視界を妨げる物はなかった。

？？　陸自が保有するＡＨ－６４Ｄアパッチ・ロングボウ戦闘ヘリのコクピットで、操縦士の一等陸尉は眼下に敵を発見した。

「目標視認した。発砲許可を請う」

？？すぐに本部から返答が来た。

『攻撃を許可する。使用火器は任意』

「了解」

？？　敵は塹壕に身を隠していた。数は二十数人。戦闘ヘリにとっては、地対空誘導弾を持たない少数の上陸部隊は敵ではなかった。

「チェーンガンだけで片付けろ。二時方向の敵から狙え」

「分かりました」　？コクピット前部の射撃手席に座るガンナーの三等陸尉は、自分のヘルメットと三十ミリ機関砲を接続した。見た方向に砲口が追随するアイリンク・システムだ。

？？　塹壕に隠れている韓国の特殊部隊員に照準をつけ、ガンナー

はトリガーを引いた。
???　アパッチの機首下部に装備されたＭ２３０機関砲がチェーンによって駆動し、三十ミリ機関砲弾を発砲する。車輌も破壊できる強力な弾丸が命中した隊員は、一瞬で粉砕されて肉片となった。
???　数秒の掃射で、敵を五人殺した。
???ガンナーが次の目標にチェーンガンの照準をつけた刹那、機体から金属音が弾けた。銃撃だ。
???　機体は頑丈でも、ローター基部は脆い。操縦士はコレクティブを持ち上げ、アパッチを上昇させた。
???　だが、コクピットに警報が鳴った。
???テールローターに異常……？

???　韓国海軍の特殊部隊は、Ｓ島にアンチマテリアルライフルを持ち込んでいた。ヘリ対策だった。
???　一人の隊員がアパッチに向けているのは、バレットＭ８２対物狙撃銃。全長を切り詰めたブルパップ式のＡ３モデルだった。
???　隊でも最優秀の狙撃能力を持つ彼は、二発目でうまくアパッチのテールローターを破壊した。
???　１２．７ミリ弾を受けたアパッチが、尾から灰色の煙を吐き始めた。

???　メインローターで機体にかかる回転をテールローターで相殺しているヘリコプターは、テールローターを失えばトルクの反作用

により回転を始める。
???　今のアパッチは、そういう状況だった。操縦士は必死にペダルを踏んだが、軸を破壊されたテールローターはたちまち停止し、アパッチは回転速度を上げつつ下降してゆく。

「堕ちるぞ！　?衝撃に備えろ」

???　視界がぐるぐる回転している。気分が悪かった。やがて、地面から突き上げられるような衝撃が操縦士とガンナーを襲った。
???　アパッチは墜落しても、機体下部が潰れて衝撃を吸収する構造になっている。
???　墜落後も、二人は軽傷で済んだ。
???　アパッチのキャノピーを開け、機外に出た操縦士は、不時着時の護身用に装備してある九ミリ機関拳銃のグリップを握りしめた。
???　……敵の後ろ側か。
???　二人は、救援が来るまでその場で待つことにした。

???　戦闘中だった第一空挺団の陸自隊員たちは、アパッチの墜落を目の当たりにして驚愕した。
???　世界最強の戦闘ヘリが、あっけないものだ。
???　これで、敵には優秀なスナイパーがいると判明した。
???　すると、今度はヘリではないエンジン音が響いて来た。松崎が後ろを見ると、１０式戦車と８９式装甲戦闘車だった。
???　十メートルほど離れた１０式戦車の砲塔が旋回し、轟音とともに主砲が火を噴いた。射出された百二十ミリ多目的対戦車榴弾は松崎たちの頭上を通って着弾し、炸薬の爆発によって四人の特殊部

隊員を吹き飛ばした。爆発の中心部にいた者は、肉片すら残らないだろう。

？？　続いて８９式装甲戦闘車がエリコン製の三十五ミリ機関砲の発砲を開始した。

？？　敵も撃ち返してきたが、アンチマテリアルライフルと言えど、装甲の厚い戦闘車輌の前面からでは大した効果はなかった。

？？　十五分後、韓国海軍特殊部隊は全滅した。

Ｐｈａｓｅ？：殲滅（後書き）

更新が大変遅くなって申し訳ありません。

Ｅｐｉｌｏｇｕｅ：三日月島

「馬鹿な！」

薄暗いＣＩＣで、韓国海軍Ｋ島奪取艦隊の指令は握り拳を海図デスクに叩きつけた。周りにいたクルーがぎょっと視線を向けたが、指令の意識には入らなかった。

（海軍トップ……いや、これは国家からの命令だ。君に拒否権限はない）

あくまで冷徹な海軍参謀総長の声音に、指令は送受話器を握り締めた。

冗談だろう？

それが指令の本音だった。

突然のミサイル攻撃で虎の子のイージス艦『セジョンデワン』を失い、報復の対艦ミサイル一斉射撃の準備中に来た命令が、「直ちに引き返せ」　だ。ふざけるな、と怒鳴りたい心情を抑えて、指令は声を絞り出す。「……引き返せとおっしゃるなら、納得のいく理由を説明していただきたい」

（高度に政治的な判断だ。……それに、あれだけの惨敗を喫しておいて、勝てる自信があるのかね？）

「敵の第二次艦隊は出港したばかりです。奴らはスタンダードを撃ち尽くし、シースパローも底をつきかけている。いまＳＳＭで飽和攻撃を仕掛ければ、敵の防空網を無力化できるはずです。その後、空軍の戦闘機に制空権を確保させれば、Ｋ島の制圧は容易です」

（第二次艦隊が到着したらどうする？）

「それは……」

（同じことの繰り返しだよ。今までは”戦えない軍隊”と舐めてきたが、牙を剥いた自衛隊の戦闘能力は、君たちが身に沁みて理解したはずだ）

「では、上陸した水中処分隊（UDT）の隊員はどうするのですか。制空権が確保できなければ、彼らの援護は不可能です。海自の水中索敵網が強化され、潜水艦での接近はもう不可能です」

（……残念だが、彼らの援護はもう無理だ。言ったろう、撤退は政治的判断だ）

「それはどういうことですか」

（韓日の首脳が、極秘で会談を行った。

今から言うことは最上級国家機密だ。知る者には緘口（かんこう）令をしいている。心して聞け）

指令はひとつ深呼吸をして、「……はい」　とだけ答えた。

（日本の首相が和解金を提案し、大統領はK島の領有権と引き換えに了承した）

一瞬、何を言われたのか分からなかった。

あの傲慢なウナバラ総理が和解金を提案？

調子に乗り始めた日本に対し頑として強硬姿勢を貫いてきた大統領が、それを了承しただと？

われわれ軍人が死ぬ覚悟で取り返そうとした島を、下劣な侵略民族どもに売ったというのか？

（いま君らが海自に攻撃を仕掛ければ、会談で結ばれた停戦協定を破ることになる。その意味は、軍人の君なら分かるだろう？

すぐに引き返したまえ。指示は追って連絡する）

通信が終わった。

指令は送受話器を置き、横にいた五十代の艦長を見た。「全艦に通達」

「は」

「百八十度回頭。帰還する」

「……分かりました。……ＣＩＣより艦橋。取り舵いっぱい、進路二一八一〇」

指令は席に腰を沈め、無言で頭を垂れた。

※

停戦協定締結の一報は、速やかに展開部隊の全自衛隊員に通達された。

「……終わったようですね」

Ｓ島にある陸自指揮所の前で、第一空挺団の宮内三佐はマイルドセブンに火をつけた。宮内が差し出した一本を受け取った第一次派遣部隊長の越村一佐は「そうだな」　と返し、紫煙を吐き出す。

「第二小隊の隊員たちは、残念でした」

「護衛艦の見張（ワッチ）り員もだ。……それに、韓国軍の兵士たちも」

「ええ」

勝ったという実感は、なかった。

考えたくなくなった宮内は、視線を傾きつつある太陽に向けた。

それほど疲れは溜まっていないはずだが、張り詰めっぱなしだった

緊張の糸が切れたらしく、全身をだるさが襲う。
隣の越村は、半長靴で足元の泥の塊を蹴った。
「人間てのは、つくづく下らん生き物だ。こんな泥の島のために……」
「自明ですね。これまでの歴史を紐解いても、人間が崇高な生物だったことなんて皆無に等しいですから。
戦争が実に下らないということを、日本人は六十年ぶりに思い出すでしょう。
それが日本にとってプラスになるかマイナスになるかは、日本人次第といったところですが」
越村は何も言わず、踵を返してテントに向け一歩を踏み出した。
「……うまいタバコだった。ありがとう」
背中で聞いた宮内は、もうしばらく立っていることにした。

※

翌年の七月、一機のＣ－１３０輸送機がＳ島の滑走路に着陸した。
後部ハッチが開き、迷彩服の自衛隊員たちが小銃を抱えて降りてくる。
「懐かしいな、Ｓ島」　一年ぶりに降り立った松崎が言った。
「三日月島だぞ」　隣に立つ川嶋が返す。
「そうだったな」

Ｓ島の正式名称は、三日月島となっていた。
今では、大抵の地図に載っている。
硫黄島と同じく、自衛隊と米軍の共同演習場となっている三日月島では、主に本州では難しい実弾射撃の訓練や、上陸訓練などが行われている。
それだけでなく、民間団体の協力を得て植樹なども行われており、将来的には島の一部を民間に提供する計画もあるらしい。

「結構にぎやかになったな。宿舎に自家発電施設、陸自に米陸軍に海兵隊……か」
「まぁ、演習にはもってこいの島だからな」

紺碧の海上に浮かぶ島は、真夏の眩い日差しの中、まどろんでいるように見えた。

Ｅｐｉｌｏｇｕｅ：三日月島（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3179l/

三日月島

2011年9月21日18時44分発行